

《卒業研究報告》

厳しい優しさ

一子供の教育のために必要なこととは一

池田 陸人（荒井ゼミ）

はじめに ある日の参与観察にて

8月の日差しが、グラウンドを照り付ける午後3時、調布の中学生のクラブチームAは、夏休み中の市内のグラウンドにて練習を行っていた。練習に参加するメンバーは中学生25名、指導に当たっているのは、監督と、コーチとして参加している著者の2名である。

練習開始にあたり監督は「今日のこの練習は、試合のゴール前からどうやって点をとるかということ想定しているから、その通りのイメージを持ちながら動いて欲しい」と説明した。大多数の人はしっかり聞いていたが、一部の選手は、ズボンを直したり、ソックスや髪の毛をいじったりしながら、ちゃんと聞いているのか分からなかった。

練習が進み1時間ほど経過したころ、選手たちの集中力が切れ始め、ミスが増えてきた。監督は彼らを集め、「もっと試合中と同じ雰囲気ですくまでいくイメージを持った中でやって欲しい」と言うが、状況はあまり変わらなかった。

暑さの中で、選手たちの気力が萎えてきていることを著者は感じつつ生徒と共に、グラウンドを歩き回りながら指導をしていた。

唐突に、「ガシャン」という音が聞こえた。音の方向を見ると、監督が座っていたパイプ椅子が倒れ腰に手を当てて無表情で、練習する選手たちを監督が見つめていた。そして監督は再度選手たちを集め、淡々とした口調で、改めてイメージして欲しいことを説明した。その時の選手たちは最初の状況とは異なり、誰も服装や体をいじるもの

はいない。全員が監督の言動を注視しながら、集中して聞いているように見受けられた。

その後、監督の意図を理解した選手たちは、再び集中し始め、練習に取り組む姿勢が変わった。

（2023年8月20日フィールドノーツより）

この出来事について、監督は練習後、以下のよう

に著者に説明した。

「言葉で伝えるよりも、目で見せる方が効果あるんだよね、昔は話を聞かないやつ胸ぐらを掴んでフェンスに押し付けることもあったけど、今はもうそれやっちゃいけないから、人じゃなくて物を使って、パフォーマンスしてみせるようにしているんだよね。」

（2023年8月20日フィールドノーツより）

確かにただ淡々と話を聞くようにだけ言っても集中力の切れた中学生にはほぼ無意味である。そんな中でも視覚的で聴覚的なパフォーマンスを行い普段とは違う姿勢を見せることで、子どもたちの中にただ事ではないという緊張感を出させる。そうすることによっていつもとは違う雰囲気です話を聞かせることができ、改善を強く訴えることができた。実際にその後の彼らは全く異なる動きを見せただけでなく、プレーの改善を彼ら自身で話し合いながら行うようになったのである。

さらに椅子を倒した後、監督は著者に子どもたちの近くにるように伝えていた。その理由につ

いては以下のように語った。

「ここで大人がみんな子供たちから離れると指導する側と選手の間で溝ができてしまう。溝があるところら側の伝達が難しくなったり、良好な関係が築けなくなったりする。そうなるはずいからパフォーマンスをしていない方の大人が近くにいることでその間を取り持つことができる。あとは、彼らが信頼できる大人がそばにいてだけで例のパフォーマンスとか指導者側に対して愚痴が出たとしても、保護者にこぼす前に近くにいる指導者に伝えれば保護者からのクレームが来にくくなるし、その愚痴を指導者側が聞き取って彼らの思考を察する材料を拾うこともできる。だから陸人（筆者）があいつらの近くにいるように言ったんだよ。」

（2023年8月20日フィールドノーツより）

この件の後の監督が直接指導していた約3カ月間、練習や試合に対する姿勢は良いままであった。一見かんしゃくを起こした大人の暴力的な行為に見えるが、たった一度椅子を倒しただけでその日だけでなくその先でも監督が見せたパフォーマンスの効果は残っていたのである。

第1章 研究の概要

第1節 研究の背景 厳しい指導による教育に対する世間の目

近年、教育の現場での厳しい指導による教育に関する報じるニュースがよく見られる。

例えば、体罰などの傷害行為や暴力行為の事例では熊本の私立高校サッカー部で男性コーチが無抵抗の部員に暴力を加えた動画がSNSで取り上げられ炎上した問題（大貫 2022）や福岡県の強豪高校サッカー部の監督が部員に体罰を加えていたとして辞任することになった問題（スポニチア

ネックス取材班 2023）は記憶に新しい。

また、体罰や暴力ではないが、厳しい指導によって起こった問題として、小学生を対象としたサッカースクールでコーチが子どもたちに何度も罰走をさせたり（島沢 2021）、試合中に「帰れ」「次の試合に来るな」といった暴言を吐いていたことや静岡県内の高校サッカー部の男性コーチが部活を休んだ部員を罰走させたとして保護者から指摘を受けて指導停止処分を受けた問題（小山 2023）など、数々の事例があげられる。これらのニュースはスポーツ界全体における厳しい指導による教育の問題を浮き彫りにした。

その厳しい指導による教育に対する世間の声は多岐にわたる。多くの人々が、厳しい指導が子どもの成長に必要なだと考える一方で、その方法や程度については議論が続いている。佐藤俊治によると運動部の「厳しい指導」について約57%の人が否定的な意見を持っており、日本サッカー協会も暴力行為を伴う指導は選手の意欲や楽しさを削ぐものであり、決して許されるべきではないと明言している通り、暴力や罵声を伴う指導には強い反対の声が上がっている（佐藤 2018）。

その一方で、約46%の人が暴力や過度な罵声が選手に与える悪影響を認識した上で、厳しい指導が選手の技術向上や精神的な強さを育むのではないかと考えていることも分かった。その中の意見として「強くなりたいなら、練習段階から身体や精神にある程度負荷をかけるような厳しさはあってもいい」という意見や「理不尽な暴力は反対ですが、重大な規律違反などをした場合には、教育のためにやっても良いのではないかな。僕は殴ることも教育者の愛情だと思っています。でも今の社会では理解してもらえないことも理解しています。もう古いんでしょうね」という意見も上がっている（佐藤 2018）。

これらの意見やデータから考えられる世間の声は、厳しい指導が全く不要だというわけではなく、

その方法や程度についてのバランスが重要であることを示唆していることが考えられる。

第2節 先行研究

先行研究においては、教育において従来の行われてきた厳しい指導に対する問題点として、今現在も行き過ぎた指導が行われてしまっていて、Human Rights Watchの報告「数えきれないほど叩かれて」によると「日本では、子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することがあまりにも多い。その結果、あまりに多くの子どもにとって、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となってしまっている。暴力は、一種の指導方法として、日本のスポーツ界に深く根付いている。試合や競争で勝ち、個人の人格を向上させるためには不可欠だと、受け止められてきた。この危険な慣習は、スポーツにおける暴力を根絶する上で、大きな壁となっている。指導者や保護者、さらには選手の間にすら、スポーツにおける体罰には意味があるという誤った考えが蔓延している。そして結果的に、子どもたちが苦しんでいる。」という現状が明らかになっており、多くのアスリートが指導者による虐待的行為に悩まされていると問題提起している(Human Rights Watch 2020)。また、2012年に大阪府の運動部に所属する高校生が行き過ぎた指導を苦に自殺した事件を機に体罰が社会問題として強い注目を受けた。しかし、渡邊裕也らによると、このような事件を受けても、体育大学に在籍する大学生の半数以上が指導者の暴力を肯定的に捉えていることなどが指摘されている(渡邊・西村・八尋・池田 2024)。

また、今後の方針として、星野豊は表面的な平穏や規則自体の完全無欠性ではなく不幸にして事件や事故が生じたとしてもかかる事態を契機としてより望ましい方向性を模索すべく家庭などの生徒に関わる関係者などとの連携を強めていくこと(星野 2023)を指摘している。また、山田潮は素質

的条件を分析し、問題がどこにあるか、どういう指導法を取ったら良いかという計画を立てその反応を見てさらにその計画を修正するなどして不適切な指導のあり方を改めるようなこと対策として挙げられると述べている(山田 2024)。

以上のような先行研究は見当たるものの、現場で実際にどのような形で厳しい指導がおこなわれているのか、その厳しい指導がどのような意図の基で行われており、また受け手側がそれをどのように受け止めているのかの詳細について参与観察に基づいた社会学的な研究は行われていない。スポーツの指導というものは、パワーハラスメントと結びついた形で批判されるが、指導は部分で切り取るだけでは判断することが困難であり、前後のつながりや教員と生徒の関係性とその指導の文脈を把握する必要がある。そのため、本研究では中高生へのスポーツの指導の現場への参与観察により、指導の内実と文脈を把握し、その上で当事者へのインタビューを基に指導の意図を把握することを通じて、現場での指導を総合的に検討していく。

第3節 研究の目的

前述したように、近年、子どもを教育する中で、厳しい指導による教育はあまりよいものとされていない傾向にある。もちろんパワーハラスメント(以下 パワハラ)は良くないのだが、著者自身が教育の現場に立って感じたことは厳しい指導による教育は必要であるということである。

そこで、本論文では厳しい指導による教育の認識や実際に教育の現場に立っている人のインタビュー、著者自身のフィールドワークより考えたことを基に子どもの教育に必要なことを明らかにしたい。

また、ここでの厳しい指導による教育とは、強い口調や声量の大きさ、身振りや行動などによるもの、または厳しい言葉で物事をはっきりと伝え

るものとする。

第4節 調査手法

本論文では、中学生のサッカーの指導に携わっている20代男性1名、50代男性1名の計3名、50代男性の私立中学・高校の現任教員1名と、厳しい指導による教育を受けているまたは受けてきた現役男子高校生3名にインタビュー調査を行った。また、著者自身も中学生のサッカー指導現場にて、コーチとして参与観察を2021年1月より、現在まで行い、実態を調査した。なお、調査の限界としては、著者自身がサッカー選手であったのが高校生までだったこと、インタビュー協力者にとって著者は後輩または指導する側という立場であったことにより、協力者たちが配慮して控えめな発言をしている可能性がある。

第2章 対象の概要やプロフィール

第1節 クラブチームの概要

著者の所属するチームは東京都調布市に拠点を置き、中学生を対象にサッカー指導を行うクラブチームである。今年でクラブ創設より28年目になる。著者も中学生時代に20期生選手として所属しており、高校卒業後にクラブスタッフとして再加入し、2024年の時点で4年目となる。普段の活動場所は、拠点としている調布市内を主とし、他に府中市や川崎市多摩区のグラウンドも活用している。卒団生には、Jリーガーが複数名いたり、Jリーグクラブのユースや強豪高校へ進学した選手も多数いる。

第2節 インフォーマントのプロフィール

・Aさん

Aさんは神奈川県出身の23歳。兄の影響を受けて、幼いころからサッカーを始め、中学では関東大会へ出場。高校では都内の強豪校へ進学し、Bチームであったが、キャプテンを務めるなど、活

躍。そして、高校を卒業し、都内の私立大学へ進学したと同時に指導者へと転身。3年目には担当していた学年が関東大会へ出場し、あと一勝したら全国というクラブ史上最高戦績を出した。

・Bさん

Bさんは、東京都出身の49歳。幼い頃よりサッカーをはじめ、高校時代には、読売サッカークラブ（現東京ヴェルディ）ユースの選手として活躍。高校卒業と同時に指導者へ転身。東京ヴェルディ普及コーチや東京都クラブユースU18選抜監督を経て、現所属クラブの監督に就任。その後、テクニカルダイレクターとしてクラブの育成に携わっており、教え子にはプロサッカー選手が複数名いる。

・Cさん

Cさんは東京都出身の52歳。物を作ったり、加工することが好きだったため、工業科の高校へ進学。そして私立大学に進学したのち、教員として母校へ戻る。その後、30年教員として勤務。

・Mさん

Mさんは東京都出身の16歳。小学校入学時からサッカーを始め、中学1年生からの3年間は前述したサッカークラブにて著者の指導を受ける。中学校を卒業後は私立高校へ進学し、今現在もサッカーを続けている。

・Yさん

Yさんは東京都出身の16歳。小学3年生からサッカーを始め、中学生の3年間は主に墨田区で活動するクラブチームにてサッカーをプレーし、中学校を卒業後は著者がサッカーを指導している私立高校へ進学し、今現在もサッカーを続けている。

・ Sさん

Sさんは東京都出身の18歳。小学校入学時からサッカーを始め、中学生の3年間は主に東久留米市で活動するクラブチームにてサッカーをプレーし、中学校を卒業後は著者がサッカーを指導している私立高校へ進学し、今現在はサッカー部を引退し、大学受験に向けて勉強をおこなっている。

第3章 厳しい指導による教育とは

第1節 厳しい指導への認識

近年、体罰やパワハラなどのニュースが流れ、厳しい指導による教育が良くないという意見が広まりつつあるため、厳しい指導による教育がしづらくなってきている。果たして、中学年代に対してもこの風潮のまま厳しい指導による教育が不要となる時代になるのか。具体的な例を見ていく。以下は、著者が、「厳しい指導による教育はいいのか」と質問した際の回答である。

Aさん：「厳しい指導は必要だと思うよ。理由としては、結局やっぱり今の時代の子はすごく内向的な子も多いし、やっぱりどうしても甘い方に行く子も多い。結局、人間は多分時代に関わらずやっぱりそういう甘えが出ちゃう。やっぱり、中学生だとなおさら厳しみたいなのは必要なと思う。」

(2024年3月9日インタビュー)

Bさん：「まず、自主性っていうのは、ある程度の知恵をちゃんと獲得した子が初めてその自主性を尊重してもらうべきで、まだ13歳くらいの未熟な子に自分で考えていいよと言ったところでその先まで想像を膨らませる能力がまだないから教育としてはただの放任、要は何にも指導していないのと同じになる。育成年代の中学生に対してはさっきも言ったある程度の知恵だったり、判断の引き

出しを身につけさせるのが大事。それには厳しさが必要になってくるのではないかな」

(2024年3月24日インタビュー)

ここで言えることは厳しい指導は必要であるということである。Aさんが言うように甘えや楽しさを許容しすぎると子どもの成長にとってあまり良くないのかもしれない。

実際、フィールドワーク先の生徒を観察していても、保護者が子どもの意思決定を行ったり、何かと甘やかしたりするような過保護な環境で育った子供はわがままが多い、上手くないとさじを投げる、周りを気にせず、自分のしたいことを優先する、都合のいい言動や解釈をして、自分が一番と考えるなど、幼さが目立つような印象を受けた。

毎日車で送迎してもらい、欲しがった物はほとんど買ってもらえるような環境で育ったある生徒は自分のプレーが上手くない日が続いていたある日、指導者が自分に合わないこととチームメイトが下手ということを言い訳にして練習に来なくなり、その保護者からも「子どもがこう言っているので辞めさせていただきます」と言ってきた。その生徒はその後、別のクラブに移ったがそこでもうまくいかず、中学卒業と共にサッカーをやめていた。それらのことから、子どもに対してあえて厳しく指導したり、接したりすることは成長を促す中で必要だということが考えられる。

また、Bさんが言うように自分で考え、判断して、選択する力を伸ばすためにあえて厳しい指導も交えながら大人の視点から色々な選択肢を示し、教育していくことも大切なのだろう。

さらに、著者自身の選手およびコーチとしての経験から言えることとしては、怪我の危険性がある時や誰かを傷つけることなど人として良くないことについてはあえて強い口調でそれは良くないよということを伝えると「その事象についてこん

な言動をとると良くないんだ」という印象をより強く与えられるのではないかと考えられる。そのため、そういった時には厳しい指導も必要であるとする。以上のことから、中学生というまだ成長段階の子どもに対しては厳しい指導による教育も必要なのだろうと考えられる。

第2節 今と昔の対比

前述の通り、パワハラや体罰に対して、世間が過敏に反応するようになってきたが、以前は体罰や暴言は教育や指導の現場では当たり前に行われていた。当時はなぜ体罰や暴言が問題視されなかったのか。また、なぜ今になって体罰や暴言が問題視され始めたのか。これについて見ていく。以下は、著者が、「子供を指導する中で昔と今で何か変わったことはあるか。また、なぜ昔の当たり前だった体罰や暴言が今はダメとなってきているのか」と質問した際の回答である。

Aさん:「昭和世代の人は戦争を体験してる人とかが教師をやってる時の教育を受けてくるから、自分はこうやって育てられてきたって思って同じことをやろうとする人が多かったのかもしれない。保護者の年代もそんな感じの人が多かったから、体罰とか暴言があっても特には気にならなかったのかなって思う。俺も4、5年しか指導してないけど最近では多分保護者が受けてきた教育が体罰当たり前の教育ではなくなったから、子供に対しても体罰はいけないという認識になってきたのかもしれない。」

(2024年3月9日インタビュー)

Bさん:「やっぱり言葉遣い。子供に対して、呼び捨てでもダメになってきてるし、あだ名なんでもっとダメ。昔は許されてたことも30年近く経って、段々教育的な要素が強くなって

ダメになってきてる。その理由としては、保護者や世の中的なところも含めて、体罰は良くない。殴って良いことはない。っていう社会的に言われ出してるからかな。あと今になって昔の当たり前だったことが、色々言われてきてるのは、情報っていうのが簡単に回るようになってしまった影響もあると思って、たまに子供が殴られてるのがSNSで拡散されたりするじゃん。それって背景関係なしにただ殴ってるとこだけ切り取られて拡散されるから、余計良くないように見えちゃう。それも理由としてあるんじゃない。SNSってかなり大きい影響力があるから。……最近の子供は、電子機器を持ち始めて、疑問に思ったことをすぐ調べられるようになった。情報網が広がって色々なことを知れる環境になったから、子供の質が変わったというより、子供を取り巻く環境が変わったと思う。」

(2024年3月24日インタビュー)

まず、昔と今の違いは世間の考えが大きく影響を与えているのだろうと考えた。最近もよく「世間体を気にして」という言葉をよく聞いたり、使ったりするが、世間の認識の変化が教育や指導に影響を与えているのだろうと考えられる。そして、その世間の認識は、保護者の受けてきた教育や情報収集が簡単になったことなど、様々な原因があり、変わったのではないかと考えられる。また、興味深いのは電子機器やSNSの普及による影響というものだ。良くも悪くも情報が簡単に手に入るようになったので、一部分のみを切り取って本来の実態とは異なる認識が植え付けられるような情報が出回りやすくなったり、疑問に感じたことをすぐに調べ、知ることが出来るようになっている。これらのことが、昔は問題視されなかった厳しい指導による教育が問題視されやすくなった原因と

考えられる。

第4章 厳しい指導による教育の必要性

第1節 厳しい指導による教育の良い点

厳しい指導による教育の中には一長一短のそれぞれの特徴があると考えられる。それらを明らかにするべく、厳しい指導による教育を受けてきて、今もなおその環境下で生活している現役高校生3名へのインタビューを行った。本節ではそのインタビューを基に厳しい指導による教育のメリットを示していく。本節では初めに協力者の概要を記し、その後著者より「厳しい指導の良い点はあるか」という質問をした際の回答を記していきたい。

Mさんの事例

Mさんは都内の私立高校でサッカー部に所属している高校1年生である。

頑張ることを強制されたり、怒られたりすることが嫌いな彼は小学生からサッカーを始め、中学生になると筆者の指導するサッカークラブに入団した。そのクラブで筆者はMさんを3年間指導してきたが、当時の監督からは度々無気力なところを指摘され指導されていた。Mさんは疲れてくると露骨に走らなくなることが多い。このようなことがわかるノーツがある。以下は、冬の試合中のMさんの様子である。

Mはすでに30分ほど試合に出ていたとはいえまだまだ走れるだろうというような様子だったが、徐々に走らなくなってきた。Mは監督から「走れよ!」と言われていた。怒られるのも頑張ることを強制されるのも嫌いなMはそれでも走らなかった。むしろ嫌そうな顔をしていた。試合後には「走れないなら試合に出なくていい。」と怒られていた。

(2024年1月8日 フィールドノーツより)

Mさん:「怒られるのは嫌いだけど良いとこ

ろもあると思う。なんでもかんでも怒るとか特定の人しか怒らないとかは良くないと思うけど、誰が見ても悪いよねってこととかさすがにそれはダメだよねっていう状況だったりしたら怒ってもいいと思う。じゃないと何も変わらない人もいると思うし、怒られたいから同じことはもうしないって思う。だから厳しく怒ることはまあまあメリットがあるかなって思う。逆にデメリットは怒られ続けるとその人の話を聞くのが嫌になっちゃうし、なんかすごい嫌な気持ちになることだと思う。」

(2024年8月21日インタビュー)

ここから考えられることは、怒られることが嫌いなMさんだからこそ厳しい指導による良さに気づいているのではないかということである。彼の場合、同じ「怒られた」という経験でもただただ嫌な気持ちになっただけのものとその指導後に頑張ろうと思えたものをそれぞれ受けてきて感じたことを回答してくれたのだろう。

頻繁に厳しい指導を行ってしまうと指導者から話を聞くことだけで嫌気がさしたり、指導に対してまたか・・・というような印象を持たれたりしてしまい指導による効果が薄れてしまう。ある一線を越えた出来事や言動のみに対して厳しさを持って指導することでだめなものはだめと明確に伝えることができ、今後同様の行為を行わないようになることが期待できる。それに加えて、やってはいけないこととやって良いことの線引きができるため、やって良いことの範囲内での行動が容認されたことになり、その許された中で様々なアイデアが出る可能性もある。

そのため、あらゆることに対して厳しい指導を行うのではなく、ある一線を越えたものに対しての厳しさは必要であり、それによって出来事や言動に対して善し悪しが明確になるということが考

えられる。

Yさんの事例

Yさんは都内の私立高校のサッカー部に所属している高校1年生である。

彼は中学生までは厳しい指導の中でサッカーをしていなかったが、進学先の高校では厳しい指導による教育が行われており、そこで厳しい指導による教育を初めて受ける。真面目なYさんは真剣に考えておこなった行動(プレー)がミスになってしまい、怒られることが多々あった。以下は、1つの大会が終わった暑い6月の都内K高校との練習試合中のYさんの様子である。

Yは難しいシチュエーションではなかったがシュートを外してしまった。それに対して、監督から「そういうシュートを決めないから試合に負けるんだ。」という声が挙がった。そして試合後にも「あそこで決めきれないなら試合で使えないよ。」と指導されていた。その後、Yはひたすらシュートの練習を行っていた。

(2024年6月16日 フィールドノーツより)

Yさん：「(厳しい指導の良い点は)あると思う。例えば大人になった時にやってはいけないこととか万引きとか法に触れるようなことをした時は本気で怒鳴った方がいいと思うし、命に関わるようなことも怒鳴った方がいいと思います。だめなものはだめと言わないとその先で苦労することが増えると思う。あとは逆に怒られたことをプラスに捉えて、言われてるうちの方がいいんじゃないか?って思ったりもする。昭和っぽいかもしれないけど怒られてることは、何も言われないよりありがたいことだと思っているから頑張ろうって思ったり、改善しようって思う時があ

る。だから厳しく指導することが良い場面もあると思う。」

(2024年8月22日インタビュー)

ここでもMさんと同様にだめなものはだめとはっきり伝えることが必要であるという回答が得られた。Yさんはだめなものはだめと伝えることもある種の優しさであるということを示唆している。また、Yさんは厳しさを持って指導されることがありがたいことととらえていた。高校入学まで厳しく指導されることがなかったYさんは厳しく指導されることに対してネガティブなイメージがない状態であるため、厳しさをもって指導されることをありがたいと捉え、指導を受け入れ改善しようとしている。その結果、厳しさを持って指導されないことに危機感を感じるほどに厳しい指導による教育を必要としている。これらのことから、厳しい指導による教育の良さはだめなものはだめと伝えられることと厳しさを持って指導することに恩恵を感じ、さらなる改善が見込めることであると考えられる。

Sさんは都内の私立高校のサッカー部に所属している高校3年生である。

彼は中学生の時に東久留米市内の一つのミスも許されないような厳しい指導が行われていたクラブチームに所属しており、高校生に入るとより厳しい環境の中でサッカーをすることになる。一学年上の先輩が引退し部内の最高学年になるとキャプテンに就任し、チームの責任者として活動中に起こったことや部員の言動についての責任を取られ、怒られ役となることが多くあった。以下は、5月の公式戦を控えた練習前。監督が選手を集め、これから公式戦に向けてしっかり練習をやっているという話をして練習が始まるものの、簡単なミスや公式戦に対する意識が足りておらず、練習がただだらだらと行われていた。その際のSさんの様

子である。

Sは監督に呼ばれて「まずチームが良くない原因として中心がもっと周りに声をかけなければいけない。キャプテンであるSがしっかりとそこに対して声をかけてチーム内での修正をかけなければいけない。Sが不甲斐ないからチームが良くならないんだ。」という指導を受ける。その後、Sは必死に他の選手へ声掛けをし、練習が引き締まった雰囲気の中で進んでいった。

(2024年5月9日 フィールドノーツより)

Sさん：「(厳しい指導の良い点は)あるとは思いますが、自分は小学校がずっと言われ続ける環境にいたんで、自分だからそれを受け止めて乗り越えられたんじゃないかなと思っています。気が弱い人だったり、メンタルが弱い人だとやめちゃったり逆効果だったりするのかなって思います。強く言い過ぎても嫌な感じになっちゃって逆効果だし、弱く言っちゃうとどうせ反省とか改善とかしないだろうって思います。だから、言い方にもよるし塩梅は難しいと思うんですけど、厳しく言うことは将来的には役に立つのかなと思います。」

(2024年8月29日インタビュー)

回答に「気が弱い人だったり、メンタルが弱い人だとやめちゃったり逆効果だったりするのかなって思います。強く言い過ぎると嫌な感じになっちゃって逆効果だし、弱く言っちゃうとどうせ反省とか改善とかしないだろう」という部分があったが、これはSさんが中学生になってから高3までの6年間で多くの事例を見てその経験から言えることを回答してくれたことが考えられる。その中でSさんは指導する際の伝え方と受け取っ

た側の心境について回答してくれた。指導の中に厳しさがないとその指導を受け取った側が改善に取り組まない可能性があり、指導の意味がなくなってしまうかねない。例えば、新任の若い先生や優しすぎる先生が注意したり怒ったりしても誰もそのことを聞かずに怒った意味がなくなってしまうというのはよくあることだろう。この例やSさんの回答からわかる通り、指導するためには多少の厳しさが求められるのではないかな。

しかし、その厳しさにも限度がある。強く言いすぎるとその指導を受け取った側がネガティブに捉え、自信や改善しようとする意欲を無くし、結果的に指導が悪い方向にいつてしまう可能性がある。これが近年言われている厳しさを持って指導することの良くないと言われている点であろう。怒られたことの恐怖心から何に対しても自ら考えたり動いたりしなくなったり、指導に対する反発心から指導者への不満や不信感を抱かせることになり、その後の指導や教育が上手く機能しなくなったりする。そのため指導に必要な厳しさには限度があり、場面に応じて厳しさや伝え方を変え、子どもに改善しようとする感情を抱かせることで指導による改善を見込めることができるのではないかな。

これらのことから、指導にはある程度の厳しさが必要であることがSさんの回答から考えられる。

この3人の回答には厳しい指導による教育を受けてきた環境下にいたからこそ見えた厳しい指導のメリットが表れていた。彼らは自らが受けてきた厳しい指導による教育の良い面と悪い面に気づき、その効果を理解し、どのようにして子どもたちを導いていくことが将来の彼らのためになるかを回答してくれた。

これは厳しい指導による教育の必要性を示唆しているのではないかな。もちろん、厳しく指導することで個性が伸び悩んだり恐怖感を植え付けられ

てしまったり、極端な例だと自己嫌悪に陥り引きこもってしまったりするなどのデメリットも考えられる。彼らの回答にもあったようにあらゆることについて厳しさを持って指導するとそのデメリットが色濃く出てしまうが、ある一線を越えたものや子供たちが大人になった時に苦勞するであろうことに対してはしっかりとNOをつきつけることで彼らが大人になった時に同じ過ちを繰り返さないようになるのではないかと考える。それがインタビューをすることによって見えたメリットである。

第2節 厳しい指導の注意する点

前章でも述べたように、近年、厳しい指導による教育に対する風当たりが強くなっている。保護者の過剰ともいえる反応や意志が弱い子供が厳しい指導を受けて精神的に追い詰められてしまうことが多い中で実際に子供を指導している人は何を気にしているのか。インタビューを基に見ていこうと思う。これらの発言は、いずれも「指導する中で気をつけていることはなにか?」という著者の質問に対する回答である。

Aさん：「必ず相手の目線に立つことっていうのはすごく意識している。やっぱり厳しいことを言われた時に相手がどう考えるか、どう捉えるかっていうのをすごく気にしてて、相手が納得できるような言い方とか言葉遣いとか、そういうことは気をつけている。子どもが納得してれば保護者が何か言ってくることもないから。……それから、ネガティブな話で終わらないっていうことは気をつけている。やっぱり厳しいことばっか言っていると、自分はやっぱりダメな人間だっていう風に思っ自信がなくなっていっちゃう。そうすると、サッカーのプレーにもすごく影響してくる。でもこっちとしては期待の裏返し

みたいなことがあるから、やっぱり厳しいことを言った後には、『でも必ずお前はできると思ってるから、こうやって言ってるんだよ。』とか伝える。そうやって言われれば、相手は嬉しいし、聞く気になれるっていうか。そういうアドバイスを受け入れてくれやすくなる。だから、まあ、最終的には、ポジティブな話に持っていくっていうことは相手の立場に立って考えるってことも含めて考えてるかな。」

(2024年3月10日インタビュー)

ここから考えられることは厳しい指導による教育を子どもに納得してもらおうとしていることである。指導による効果のことや言い方を相手の立場になって考えている所から、厳しい指導による教育に対して嫌悪感やクレームを防ぐために自分の指導を子どもに納得させることに注力していることが伺える。

また、ポジティブな話で指導を終えるということによって、ただ怒っている訳ではなく指導対象の子どもへ期待を示しさらなる努力や成長を望んでいることを伝えている。これにより、厳しい指導による教育が指導対象の子どもに対して必要であることを認識させると共に指導による効果を高めているのではないかと考える。

ここから考えられることは納得感を得ようとしていることである。厳しい指導による教育に対して、保護者や子供たちからの嫌悪感やクレームを防ぐためにその指導がなぜ必要なのかを認識させている結果、厳しい指導による教育によるデメリットを薄め、メリットを濃くしていると言えるだろう。

Bさん：「例えば、サッカーの試合は子どもの発表会だと思ってるから、なるべく前向きな声掛けをしている。もし、許容できないプ

レーとかイラッとすることがあって厳しく言わなきゃいけない時は小言で死ねって言う（笑）。それで、試合後とかに感じたことをはっきりと伝えてる。やっぱり子供の良いパフォーマンスを引き出させたいならポジティブな声掛けをして前向きに捉えさせるのが一番良い。でも言わなきゃいけないこともあるからどのタイミングでそれを言うかが大事だと思う。」

（2024年3月24日インタビュー）

Bさんの発言から考えられることは厳しい指導による教育を行うべき場面も重要であるということだ。この手法では子どものモチベーションを高めてやる気を引き出してから、厳しく言うべきことを伝えている。要するに子どもを持ち上げてその気にさせてから指導することでその指導を受け入れさせやすくしているのである。そうすることによって、子どもたちは厳しい指導による教育を前向きに受け取り、効果的な指導が行えると考ええる。

Cさん：「若い頃は教育や指導に親が出てくることなんてなかった。むしろ、ぶん殴っても構わないのでしっかり指導してください、といわれることも多いくらい。だから全然気にしたことなかったけど、最近はやっといじった一言で保護者が学校に飛んできて、世間体を気にしてクビ切られることもあるくらい。言葉遣いと話す内容を気にしなきゃいけなくなったから色々めんどくさくなった。子どもも子どもで簡単にあきらめる子が多いからモチベーションを落とさないことにだいぶ気を使っている。」

（2024年3月7日インタビュー）

Cさんの発言からわかることは、以前(昭和末期

頃)では当たり前で逆に求められるくらいだった厳しい指導による教育が今となってはいじりの一つも許されないように変化しているということと子どもの性格にも変化が生まれたことによって生徒のモチベーションに気を遣う必要が出てきたということである。

前章でも記したように今現在と2000年代以前では世間の認識や子供を取り巻く環境が変化し、求められる教育も変化していつている。それによって子どもを教育していく中での注意点も変化させていくしかないのである。

また、CさんはAさんやBさんと異なり、学校現場で子どもと関わっているため接する生徒も必ずしも意欲があって来ている生徒とは限らない。そのため、学校現場はサッカーの指導と異なり、厳しい指導による教育の効果を発揮しにくい環境なのではないかと考える。

しかし、そんな中でも厳しさを持って接しなければならないことも多くある。厳しい指導による教育によって、自己嫌悪に陥ったり「もういいや」と投げ出してしまったりすることがないようにモチベーションに気を配り、生徒が前向きな改善をするように必要に応じて厳しく指導するのだろう。このことから、厳しく指導することが必要になった時に生徒がモチベーションを落とさないように気を遣いながら前向きな改善を促しているということが分かる。

これらのことから言えるのは子どものモチベーションを落とさないために前向きな声かけを行っているということ。やはり子供を気落ちさせず、ポジティブな気持ちにさせることが教育にとっては良いのだろう。それは厳しい指導をしたとしても同じである。厳しい指導イコール、マイナスと思わず、むしろ厳しい指導を前向きに捉えさせることで厳しい指導の効果がより一層際立っているのではないだろうか。もしかしたら、パワハラを訴えられたり、厳しいから、怖いからと子ども

から避けられたりする、そんな教育者はそれが上手くてできていないのかもしれない。

また、保護者についてはAさんが言うように子供を納得させるような言葉をかけていけば気にならないようだが、学校の現場で働くCさんは子どもの背後にある保護者の存在をそれなりに気をつけているようだった。

その違いについては、子ども自身が望んで通っているサッカーチームの活動と行くことが義務付けられた学校での活動でのモチベーションの差で納得感が異なり、納得できないことが多い学校での出来事が自然と保護者に伝わりやすくなっているのではないかと考えられる。

第3節 厳しい指導に有効な指導者の手法

パワーハラスメントや体罰への世間からの目が厳しくなっている中で厳しい指導による教育を行う指導者にとって有効な手法を「はじめに」で挙げた事例を基に考察していく。

まずその手法の一つとして考えられるのが感情労働とも結びついた高度なパフォーマンスである。「はじめに」で挙げた事例での監督の椅子を倒した行動は、単に怒りを物にぶつけただけではない、感情を知的にコントロールした中で高度なパフォーマンスであったということがその後の言動からもうかがえる。まず、当時子どもたちは指導者の話に集中していなかった。そこで監督は彼らの注意を引くため、そして怒りを表すために椅子を倒すという行動に出た。それにより、子どもたちの中には緊張感が生まれ、指導者の一挙手一投足にフォーカスするようになる。その結果、伝えたいことの伝達はスムーズに行われ、即効性のある指導が可能になるのである。監督の説明にもあったように「言葉で伝えるよりも目で見せるパフォーマンス」を行うことが厳しい指導による教育をする中で有効な手法なのである。また、そのパフォーマンスの効果をより際立たせるために

は指導者側のチームワークも必要であると考えられる。このことを高度に行うためには多くの人材が必要となり、それについては外部委託や教員の採用数を増やすことなどを行うことで補うことができると考えているが、本論文では十分に掘り下げることは控える。

「はじめに」の事例では、監督が怒りを表現するパフォーマンスを行い、筆者がそのフォローに入った。監督の話の中にもあったように、そうすることによって、指導による指導者への嫌悪感やクレームを最小限に抑えながら、彼らに寄り添うことができる。その連携がなければ、子どもたちは指導者への不信感やストレスを溜め込み、指導による効果が薄くなってしまったり、子どもと大人間での良好な関係を築きづらくなってしまったりする。そのため、パフォーマンスによる厳しい指導による教育の効果を際立たせるためには指導者側のチームワークも必要である。

これらのことから、厳しい指導には感情労働とも結びついた高度なパフォーマンス技術や指導者側のチームワークを活かすことが有効であることが考えられる。厳しい指導による教育の中にも、様々な影響や背景を考えながら指導するような知的な部分も求められることを示唆しているのだろう。

第5章 自主性

第1節 子どもたちの自主性を育てるために

上記のことから、厳しい指導による教育が必要なのではないか、としてきたが、その中で子供の自主性や自分で考える力をつけるにはどのようなアプローチが必要になるのか。また、正しい答えや思考を求める中で自ら考える力はどうにしてつけていくのか。インタビューを基に具体的にみていく。以下の回答は、「子供の自主性、自分で考える力をつけさせるにはどうしたらいいか」という著者の質問に対する回答である。

Aさん:「積極的にアウトプットする場を作れるかな。やっぱり今のインタビューもそうだけどずっと言葉が出てこなかったりする時があるのはそのことについて、特に考えてなかったっていうことが原因だと思う。考えてることをずっと出すには、1回頭で整理しておく必要があると思うから、普段からコミュニケーションを取るような場を最初のうちは大人が作ってあげることができれば、自然と自主性みたいな、自分で考える力はついてくるのかなって思う。」

(2024年3月9日インタビュー)

Bさん:「答えを与えすぎないっていうことかな。答えを与えすぎちゃうと子供はやっぱり答えを待つようになるから、なるべく問いかけたりとかそういったところはすごく重要かなと。もちろん、時には答えを出してあげたりとかヒントを出すことも必要だけど、中学年代については、やっぱり答えを与えすぎず、自ら考える場を作ることが大事なんじゃないかな。」

(2024年3月24日インタビュー)

まず、両者のインタビューを踏まえて共通していることは、子供の考える場を大人が作ってあげることが大事だということである。やはり大人側が子供の考える力を身につけさせたいのであれば、子供の考える場を設定して作ってあげることが大人(指導者、教育者)の役割なのではないか。

また、考えさせたい事象について子供が自らの考えを持つように促す一方で、その考えた内容が大人の思うような答えでなかった場合、「何を考えているんだ」というような考えたことを否定するのではなく、なぜその考えに至ったのかという過程を評価してあげる事が大事なのではないかと

考える。仮に引き出したい答えと子供が考えたことがかけ離れていたとしても、考えること自体を否定して、簡単に答えを出してしまうと自ら考えることを放棄してしまう可能性がある。そうなってしまうと考えることをしなくなり、自主性や自ら考える力が伸びなくなってしまうだろう。

そのため、自ら考えることを積極的に評価してあげることでより自主性を伸ばしやすくなるのではないかと考える。

第2節 考える力を伸ばすためには

蒸し暑さが残る6月上旬、教育実習期間中の筆者にとって、とても印象的な出来事があった。各教室の配膳台の横にはその台を拭くための雑巾が掛かっていた。その雑巾を使ってある生徒が配膳台を拭いていたのだが、その台から水道の蛇口までの距離が遠かったこともあってかその生徒が雑巾を友達に投げ渡した。それを受け取った生徒は雑巾を洗ってから台を拭いていた生徒に投げ返した。その後から生徒2人によるキャッチボールのような遊びが始まった。その様子を察したのか、担任が教室から出てきてその2人の生徒を呼び出した。担任は彼らに対して決して怒ることなく淡々と以下のように指導した。

「まず、雑巾はこの配膳台を拭くためのものだし、実際に拭いた後なんだからその雑巾についていた汚れが飛び散ってしまうかもしれないのでやめよう。あと、投げた瞬間に教室から人が出てきてその人に当たったら危ないし、給食を持ってきてくれている人に当たったら最悪の場合みんなの分の給食が食べられなくなっちゃうかもしれないよね。というかね、そもそも物を投げるっていうことはスポーツだと色々あるけど、日常の生活の中では物を投げる必要がある場面ってないと思うんだよね。例えば、何かごみ箱に投げ入れる時だって少し歩けば捨てられるし、友達に何か渡す時も歩けばいい。だから、この雑巾だけじゃなくて、

物を投げること自体がそもそも良くないからこれからはやめましょうね。』

この指導を聞いて、なぜその行為がいけないのかという本質の部分を理解させることと他の事象とも絡めて指導するということが子どもの考える力を伸ばすために必要なのではないかと考える。

まず、本質を理解させるということについて。ただ物を投げちゃいけないと指導するのではなく、配膳台を拭くための雑巾をなぜ投げてはいけないのかをしっかりと説明することで、雑巾を投げ合うことによって起こり得る様々なリスクを理解させることができる。行動の良し悪しの理由を説明して子ども自身の判断する材料を増やし、そこからさまざまな場面で応用させられるように考えさせることが子どもの考える力を伸ばすために必要であると考え。

それに加えて、起きた出来事に対してのみ指導をするだけではその出来事がいけないというような指導になってしまい、形を変えて他の事象が起きかねないのではないかと考える。今回の事例でいえば「雑巾を投げて遊ぶ」ことだけに対する指導を行ってしまうと、「じゃあ消しゴムは投げても良い」や「ごみ捨てめんどくさいから投げ捨てちゃおう」などと手を変え品を変え、似たような事例が起こってしまう可能性がある。年齢が下があれば下がるほどよりそういった行為が起こりやすい。それに対して、起こった事例に対してではなく、他の事例と絡めて指導することで他の事例への指導が可能であり今後起こり得る出来事を彼ら自身の力で未然に防ぐことができると考える。これにより、子どもたちが「あれはこういう理由でやっちゃダメだからこれもダメなんじゃないか」と自ら考え、行動できるようになることが期待できる。このような事例を通じて、子どもたち様々な場面で適用できる考え方を教えることの重要性を感じた。

以上のことから、子どもの考える力を伸ばすた

めには、なぜその行為がいけないのかという本質の部分を理解させることと他の事象とも絡めて指導するということが必要であると考え。子どもたちが行動する判断材料を指導によって示すことで、自主的に行動できるようになり自ら考えて行動できるようになると考えられる。

第3節 参与観察からの考察

著者が普段中学生を指導するなかで感じていることは、指導者の資質や言動によるという条件付きではあるものの厳しい指導が教育上必要であるということである。

著者は19歳の頃より中学生の指導に当たっているが、その中で様々な教育成果を見てきた。その一つの例として挙げられるのは、子どもに対して寛容な対応をしている指導者が指導していた中学生の大半は精神的に未熟なままであったということである。彼らは高校へ進学してから苦労したり、いまだに幼さが残っていたりしている。逆に厳しさを持ちながら指導に当たっていた指導者が指導していた中学生は精神的に成熟しており、言動も大人びていた。

もちろん、子どもの素質も異なるので全てが指導によるものではないが、指導方法によって人格形成が異なっていることが分かる。また、前章でもあったように時には厳しさをもって伝えなければいけないこともあるのではないかと考える。例えば、他人に迷惑がかかる行為や人や物を傷つける言動があった場合は厳しさをもって注意しなければいけないだろう。そのような行為や言動について大人が厳しさをもって怒ることで、子どもに対してその行為や言動が良くないという強い印象を与えることができる。そして、それを聞いたり見たりしていた子どもにも同様の印象を与えられる。

ここで気を付けなければならない点は、前章でも述べたように注意の伝え方であると考え。最

後に実際に著者が参与観察中に経験した事例を挙げたい。

中学一年生を担当していた際に彼らの後片付けが遅かったことがあった。その時使用していたグラウンドには決められた時間内にゴール等の片付けを行い、荷物をもってグラウンドの外へ出なければならないルールになっているのだが、彼らはその時間を過ぎても特に急ぐ様子もなくグラウンド内で座ったり遊んでいたりしていた。そこで自分は早く出るように注意し、彼らを急かした。

(2022年5月10日 フィールドノーツ)

しかし数週間後にまた同じことが起こった。以下がその時の様子である。

その日は21時までにすべての片づけを行い、グラウンドの外にでなければならなかったが、20時58分になってもまた同じ子どもたちが急ぐことなくゆっくりしていた。この状況下であと2分で外に出るのは不可能であると感じた著者は、「もう20時58分だから急げよー。(特に遅い人を見つけて)あ、また○○(生徒の名前)遅い。ほら、早く早くー。」と言いながら急かした。

(2022年5月24日 フィールドノーツ)

ここで自分はなぜ同じことが起こるのかを考え、他のスタッフとも話してみた。

中学生の解散が終わり、スタッフ間で情報共有を行った後に著者は、監督に「あいつらまた外出るの遅かったんですけど、早く出なきゃいけないって意識がないんですかね。」と聞いてみた。すると、監督は「早く出なきゃいけない理由を知らないんじゃないかな、な

んかわかんないけどとりあえず早く出ると感じてかもよ。」という意見をもらった。そのまま続けて、「理由が分かんないのに早く！って言われてもなかなか急がなきゃって気にはならないでしょ。あいつらに早く出なきゃいけない理由を教えたらそっか急がなきゃだっと思って急ぐようになるかもよ。」と言った。そして、翌日の練習後に、21時までに全ての片づけを行って外へ出なければいけないルールになっていること、その行動が遅いと鍵を閉めに来た管理人を待たせてしまうことになってしまうこと、もし後に使う人がいたらその人たちの使用時間が短くなってしまふなどの迷惑がかかること、また逆の立場になったらどう思うかなどを話した。

(2022年5月25日 フィールドノーツ)

そこから1週間経ち、またそのグラウンドを使用した練習後、彼らはテキパキ動き素早く片づけを済ませ、21時は全員が外に出て着替えを始めていた。中には早く出ようと声をかけている子どももいた。彼らに「今日は早かったね、なんかあったの?(笑)」と聞いてみると、「早く出なきゃいけないんで(にこっとした笑顔)」というような答えが返ってきた。この言動を受けて当時は話をした次の使用だったからなのか、いじっているのかは分からなかったが、次回以降も彼らは自発的に急いで外へ出るようになり、3年間を通して同じ状況を繰り返かえすことはほとんどなかった。

(2022年5月31日 フィールドノーツ)

以上の例のように、ただ注意するのではなく、そうしなければいけない理由を伝え、出来事の本質を理解させることが良い注意の仕方であると考える。この事例では何かやらなければいけないこ

との理由を説明することで子どもたちにやらなければならないというような認識を持たせることができる。理由がわからないまま行動させても彼らの中には「大人に言われたからやる」というその場しのぎのような行動を取りがちになってしまう。それでは根本的な原因にアプローチできず、形を変えて同様のことが起こりかねない。起こったことに対して指導するのではなく、起こったことの背景に目を向けなぜその言動に至ったのかに対する教育的な指導が良い注意だといえると考えられる。

厳しく指導する際もただ単に怒って指導するだけでは根本的な原因の解決にはならない。厳しく指導する中でも時には視覚的に訴えかけるようなパフォーマンスを見せたり、指導を受けた側(子ども)の理解を促すためになぜその言動に対する指導を行っているのかを説明したりすることが必要だと考えられる。そうすることで厳しく指導されたことによる印象を強く持ってもその指導がポジティブに作用し、より良い大人への成長を見込むことができる。

これらのことから、中学年代の子どもたちに対してなら、彼らの今後のことを考え、その行為や言動が良くないことをはっきりと伝えるべきである。それが中学生を自立した大人へ育てるために重要なのではないかと考えられる。

第6章 結論

第1節 リサーチクエストと仮説の検証

今回の研究では、中学年代の子どもに対して厳しさをもって指導することは必要なのかというリサーチクエストに対して、以下の2つの仮説を立てた。

仮説1：現代の社会では厳しい指導による教育は良くないとされているが、その指導にも良い面があるのではないかと考えられる。

仮説2：判断材料の乏しい中学年代の子どもたちが許容される範囲外の言動をとった場合、だめなものはだめと厳しさをもってはっきり伝えることが必要なのではないかと考えられる。

そして、著者自身が普段から行っているフィールドワークによって感じたことやその時のフィールドノート、子どもの指導する立場にあるサッカー指導者や教員、また指導を受けてきた高校生へインタビューなどを行い調査してきた。第3章では、インタビュー結果やフィールドワークから厳しく指導の必要性や昭和時代と現代の対比を基に厳しい指導による教育に対する認識を解説した。厳しい指導による教育が指導の現場では必要とされていること及び子どもを取り巻く環境の変化が明らかになった。第4章では、インタビューから厳しい指導による教育の必要性和指導の際の注意点を解説した。伝え方に配慮しながらもやってはいけないことに対して厳しさを持って指導することが必要だということが明らかになった。第5章では、インタビュー結果と教育実習でのフィールドノートから、子ども自身が考える力を伸ばすために必要なことを解説した。社会的に許容される範囲内では子ども自身が考える判断材料を大人(指導者)が与えることが必要であることが明らかになった。

以上、これまでに得られた知見を基に、リサーチクエストと仮説の検証、考察を行う。

第1項目 厳しい指導による教育の良さ

現代の社会では厳しい指導による教育には体罰やパワハラなどのイメージが先行し、厳しさを持って指導することがそのまま、悪という認識が広がっているが、厳しい指導による教育には良い面もあり、体罰や暴言などの度を超えない中で厳しさを持って指導することによってその事象に対

して強い印象を与えることができる。指導の中に厳しさがないとその指導を受け取った側が改善に取り組みない可能性があり、そうすると指導の意味がなくなってしまう。強く言いすぎるとその指導を受け取った側がネガティブに捉えてしまう可能性があるので限度はあるが、指導に厳しさを持つことで指導による改善を見込むことができる。加えて、自ら考え行動できる自立した大人になるためには物事の善し悪しを判断することが必要だが、その判断基準を示すためにも大人(指導者)がやってはいけないことに対して厳しさを持って指導する必要がある。言動の先を考える能力がまだない子どもたちに判断の引き出しを身につけさせるのが教育であり、やってはいけないことにははっきりと厳しさを持って指導することで「このような言動はいけないこと」という判断基準を持つようになり、自ら考え行動する一つの基準を与えることができる。

また、厳しい指導による教育はサッカーなどの球技スポーツを中心としたスポーツの指導や学校教育においても活かすことができる。厳しい指導による教育を行う際には第4章の3節で述べたように、感情労働とも結びついた高度なパフォーマンス技術や指導者側のチームワークを活かすことが有効であることが考えられる。この指導はただ怒りに任せた指導ではなく、指導者がそこで起こり得る様々な影響や背景を考えた上で行う必要がある、スポーツ指導の場や学校教育の場でも活かすことができる。法を犯したり、常識から逸脱した度を越したことを行ったりした子どもに対して、視覚的に訴えかけるパフォーマンスを見せることでその出来事に対する改善や二度とやってはいけないというような印象を与えることができる。

これらのことから、これらが厳しさを持って指導することの良い面であることが考えられる。

第2項 厳しい指導は必要なのか

本研究では、厳しい指導が必要かどうかをインタビューやフィールドワーク、フィールドノートなどから調査した。その中で分かったことは厳しい指導が中学年代にとって必要であるということである。ある一線を越えたものや子供たちが大人になった時に苦勞するであろうことに対して厳しさを持ってNOをつきつけることで彼らが大人になった時に同じ過ちを繰り返さないようになることが考えられる。

世間では厳しさを持って指導することはあまり推奨されていないことが多く、子どもたち自身の個性を伸ばしたり一人一人にスポットを当てながら子どもの自由を尊重しようというような風潮が広がったりしている。厳しさを持って指導することによって自己嫌悪に陥ったり個性が潰されてしまったりして、子どもの成長を妨げることもある。子どもたちがのびのび成長することを大人が止めてはいけないし、どんな子どもであれ一人一人の個性を大切にしなければならない。

しかし、本来守るべき社会のルールからはみ出ても個性だからといって容認し続けて良いのだろうか。大事な個性だからといって過保護な環境で甘やかされてきた子どもややってはいけないことをしてしまったのに適切な指導を受けなかった子どもが成長した時、自立した大人として生きていくことはできるのだろうか。彼らが一人の自立した大人になるためにも心を鬼にして甘やかしすぎず、だめなものはだめということを時に厳しさを持って指導することが必要であると考えられる。

第2節 子どもの教育のために必要なこととは

本研究では、厳しさを持って指導することが必要かどうかを調査してきた。そこから見てきた子どもの教育のために必要なこととは、社会の中で守るべきモラルやマナー、ルールなどの枠組みの中では、子どもたちの個性や自由は最大限尊重

されるべきだが、その枠組みから外れたことや度を越したことにに対しては厳しさを持って指導することだと考えられる。世間では厳しさを持って指導することはあまり推奨されていないことが多く、子どもたち自身の個性を伸ばしたり一人一人にスポットを当てながら子どもの自由を尊重しようというような風潮が広がったりしている。厳しさを持って指導することによって自己嫌悪に陥ったり個性が潰されてしまったりして、子どもの成長を妨げることもある。子どもたちがのびのび成長することを大人が止めてはいけなし、どんな子どもであれ一人一人の個性を大切にしなければならない。しかし、本来守るべき社会のルールからはみ出ても個性だからといって容認し続けて良いのだろうか。大事な個性だからといって過保護な環境で甘やかされてきた子どもややっではないことをしてしまったのに適切な指導を受けなかった子どもが成長した時、自立した大人として生きていくことはできるのだろうか。

学校現場やスポーツを指導する現場でフィールドワークしていた中で本来守られるべきマナーやモラルから逸脱していてもその言動に対する適切な指導が出来ていないまたは出来ないことが多くあった。子どもたちの中には何をしても何も言わず怒らない大人が優しいと考える人もいたが、必ずしもそれが正しいとは限らない。その子どもの将来を真剣に考え、必要な時にあえて厳しさを持って指導することも優しさであり、子どもの教育のために必要なことである。

【参考文献】

- ・青森テレビ、2024、「『勝たせなくてはいけない』と感情的になった」部活動の指導中に生徒4人に対し『体罰』高校の男性教諭(39)を戒告の懲戒処分」、TBSニュース、(2024年11月13日アクセス、<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/1551096>)。
- ・大貫聡子、2022、「秀岳館高がコーチを懲戒解雇、監督も退職 男子サッカー部暴力問題」、朝日新聞デジタル、(2024年11月1日アクセス、<https://www.asahi.com/articles/ASQ5L5H2JQ5LTIPE00D.html?msockid=2765da710cf861ba3b10ca630d12602f>)。
- ・小山祐一、2023、「常葉大橋の高校男子サッカー部でコーチが体罰か 無期限の指導停止」、朝日新聞デジタル、(2024年11月1日アクセス、<https://www.asahi.com/articles/ASR973J39R96UTPB002.html?msockid=2765da710cf861ba3b10ca630d12602f>)。
- ・佐藤俊治、2018、「2018年を揺るがしたスポーツの指導方法 『厳しい指導』は本当に選手を強くするのか」、Sirabee.com、(2024年10月10日アクセス、<https://sirabee.com/2018/11/24/20161875659/>)。
- ・島沢優子、2021、「『帰れ』『次の試合に来るな』精神的に子どもを追いつめるコーチのもとにいいのか問題」、サカイイク、(2024年11月1日アクセス、https://www.sakaikupj/series/cat_1_/2021/015399.html)。
- ・スポニチアネックス取材班、2023、「サッカー・東福岡 功労者・志波総監督退任『自分にも厳しい方』サッカー部に動揺も『指導者フォローする』」、スポニチアネックス、(2024年11月1日アクセス、<https://www.sponichi.co.jp/soccer/news/2023/06/14/kiji/20230614s00002013253000c.html>)。
- ・東海テレビ、2024、「小学校で授業中に許可なくプールへ…児童2人を20代の担任教師が“ビート板”で叩く 体罰と認定し処分」、Yahooニュース、(2024年11月8日アクセス、<https://news.yahoo.co.jp/articles/f4bba87b6da09e02b7a2ef70a4489df16899f593>)。
- ・星野豊、2023、「教育と法(第166回) 生徒指導の必要性とその限界」『月刊高校教育』Vol. 56.No.1:102-105。
- ・ミンキー・ウォーデン、2020、「数えきれないほど叩かれて：日本のスポーツにおける子どもの虐待」、

『HUMAN RIGHT WATCH 2020報告書』。

- ・ 山田潮、2024、「大学生による厳罰主義的対応に特徴付けられた生徒指導に対する意識」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』15: 121-129。
- ・ 渡邊裕也・西村晃一・八尋風太・池田和司、2024、「指導死遺族の語りによる健康スポーツ科学を学ぶ大学生の体罰容認態度の変容」『スポーツ産業学研究』Vol.34、No.3：251-261。

謝辞

本論文を作成するにあたり、インタビューをさせていただいた先生や指導者の方々、呼びかけに応じてくださった高校生の皆様、フィールドワークをするにあたり、子どもの教育とはどういうことなのかを日々ご指導していただいた先輩や監督に深く感謝申し上げます。数々のご指導のおかげで指導者として、子どもを教育する大人として大きく成長することが出来ました。また、指導教官である荒井先生には約3年間に渡って愛情深い指導を賜りました。日頃から温かくお声掛けくださったおかげで楽しく有意義なゼミ活動を行うことが出来ました。1年生では竹峰先生、下平先生はコロナ禍ということもありましたが、温かく成長を見守って下さると共に学生生活を応援していただきました。深く感謝申し上げます。

最後に人間社会学科に関わる全ての教授や友人の支え、自分を指導者として一から育てていただいたクラブや学校の指導者や子どもたちの存在があったからこそ、とても充実した学生生活を送ることが出来ました。これまでの経験や愛情を今後の人生に必ず活かし、子どもにとって良い教育者となるよう尽力します。改めて関わった全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

池田 陸人